

第1分科会

テーマ「指導力向上を目指した取組について～ローテーション道徳授業の試み～」

提 案 者 東広島市立志和中学校
司 会 者 東広島市立安芸津中学校
記 録 者 東広島市立高屋中学校
指導助言者 広島県西部教育事務所

1 はじめに

本校は東広島市の北西部に位置する自然豊かな地域に立地する全校生徒 163 名の小規模校である。学校目標「夢と志をもち 果敢に挑戦し 自己実現する生徒の育成」を掲げ、和文化的の本物体験活動を柱に、教育活動が行われている。道徳教育の推進においては、平成 22 年度から「伝統と文化を尊重し、郷土を愛する子どもの育成」をめざし、地域教材の開発や地域貢献活動等、様々な取組を行ってきた。平成 28 年度「『道徳教育改善・充実』総合対策事業」の指定を受けるにあたり、平成 31 年度からの「特別の教科 道徳科」実施にむけた指導力の向上が喫緊の課題であると考え、ローテーション型道徳授業を試みることにした。

2 研究のねらい

平成 28 年度「『道徳教育改善・充実』総合対策事業」の指定を受けた本校の今年度の研究主題は次の通りである。

<研究主題>

自他を認め 自尊感情を高める道徳教育の創造
～生徒の心に響く指導方法の工夫をとおして～

小グループでの学び合い活動を効果的に取り入れた授業づくりを行えば、自他の考えをより深く共有し合うことができ、生徒の自尊感情を高め、集団や社会の一員としての自覚と責任を育むことができるだろうという研究仮説のもとに研究を進めることにした。

生徒の心に響く指導方法の工夫として、小グループ活動を取り入れることによる、「考え、議論する」場面の充実が大きな柱となるが、その際、教員の指導力の向上を図るとともに、生徒の道徳性を育む方法として導入したのがローテーション道徳

授業である。

従来、教員にとって道徳の授業は、一つの資料で一度しか実施できないため、反省はするものの授業改善にまで至らないことが多かった。一人の教員が同じ資料を使い、全学級（6 学級）で 6 回の授業を実施することで、じっくりと時間をかけた授業準備や、授業マネジメントサイクルが可能となる。授業力を向上させることで生徒の道徳性を高めることを目的とした。

3 研究の内容

中学校学習指導要領解説 「特別の教科 道徳編」では、第 3 章道徳科の内容 第 3 節指導の配慮事項 1 道徳教育推進教師を中心とした指導体制 (1)「協力的な指導などについての工夫について、道徳科の指導体制を充実するための方策としては、全てを学級担任任せにするのではなく、特に効果的と考えられる場合は、道徳科における実際の指導において他の教師などの協力を得ることが考えられる。（以下略）」とある。

そこで本校では、特別支援学級担任 2 名を除く 9 名の教諭がローテーションを組み、道徳教育推進教師との T T 指導により、全学級（2 学級×3 学年）の授業を実施することとした。この取組により「道徳の授業」がどのように変容し、生徒・教職員にどのような意識の変化がみられたかを本稿では述べる。

4 研究の実際

(1) 小グループ活動を取り入れた考え議論する展開について

昨年度まで、一時間の授業の構成について校内で統一されたものは特になかったが、今年度は中心発問で小グループ（4 人班）での学び合いの時間

をもち、班内で全員が自分の考えや意見を言う活動と、そこででた意見を全体で交流してねらいとする価値を深める時間を授業の核に据えることとした。中心的発問後の具体的な展開は次の通りである。

- ＜個人思考＞
- ・ワークシートに自分の考えを記入する。
- ＜グループ活動＞
- ・4人班で話し合いをする。
 - ・全員が司会・記録・発表・盛り上げ等の役割を担う。
 - ・グループ内では全員が意見を出し合う。
- ＜全体での共有＞
- ・多様な観点からの意見を知り、比べ合い、違いの意味を確認したり、議論することでねらいとする価値についての考えを深める。
 - ・問い返しの発問や道徳的価値に迫る補助発問に答えることで考えを深める。

共通のパターンを示すことで、教職員が同じ授業構成のイメージを持って指導案検討ができる上、参観者の授業を見る視点や授業反省の視点も明確になると考えた。

生徒には「自分で思う・考える→人に伝える・人の意見を聞く→自分の意見を深める」の授業サイクルによる見通しを示し、授業の終わりに自己評価する場を設定することで、自己理解、他者理解、価値理解の3つの価値を深めることができると考えた。

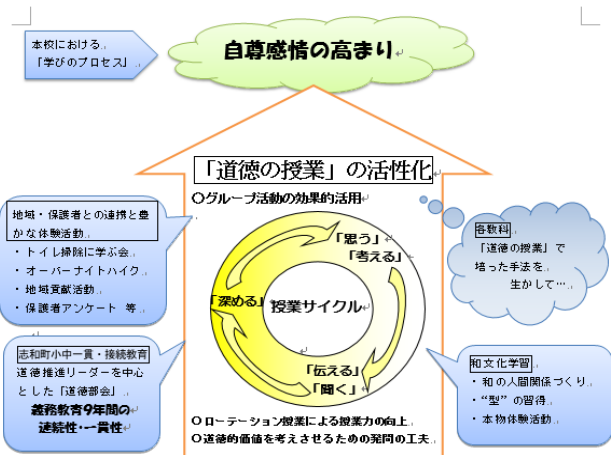


図1 研究構想イメージ

(2) ローテーション型道徳について
ア 4月～7月の実践

この時期は、道徳教育推進教師（T2）とペアを組む教員（T1）が、原則として1週間で全クラスの授業を実施した。

この間は、全学年共通の年間指導計画を作成した上で、全学年を通したローテーション道徳授業を実施した。これは、本校が小規模校であり大半の教員が複数学年の教科授業を担当している等、日頃から所属学年以外の生徒の個々の状況も把握できており、学年単位ではない、全教員でのローテーションが可能であると判断した為である。

表1 4月～7月の授業担当表（一部抜粋）

	1-1	1-2	2-1	2-2	3-1	3-2
1週目 教員 項目	小野・ 池田 A(4)	小野・ 池田 A(4)	小野・ 池田 A(4)	小野・ 池田 A(4)	小野・ 池田 A(4)	小野・ 池田 A(4)
2週目 教員 項目	湯尻・ 池田 A(2)	湯尻・ 池田 A(2)	湯尻・ 池田 A(2)	湯尻・ 池田 A(2)	湯尻・ 池田 A(2)	湯尻・ 池田 A(2)
3週目 教員 項目	清水・ 池田 C(10)	清水・ 池田 C(10)	清水・ 池田 C(10)	清水・ 池田 C(10)	清水・ 池田 C(10)	清水・ 池田 C(10)

また、発達段階の違いを考えて、授業展開や中心発問等は学年ごとに変える工夫をしながら実施することにした。以下にその一例を示す。

(ア) 発達段階に応じた導入例

内容項目 礼儀 B(7) 『ハート』（出典「心つないで」3年 教育出版）

学年	導入
1学年	生徒会で取り組んでいる「志和しぐさ」について想起させる。
2学年	職場体験学習で心がけたい礼儀正しいあいさつを考えさせる。
3学年	(礼儀に関する漫画の)吹き出しに入るセリフを考えさせる。

(イ) 発達段階に応じた中心発問例

内容項目 望ましい生活習慣 A(2) 『別にメークかけてない』（出典「心つないで」1年 教育出版）

学年	中心発問
1学年	「娘の行為は迷惑をかけていないのか。」
2学年	「迷惑をかけなければ問題はないのか。」
3学年	「娘たちの問題の根源には何があるのか。」

内容項目 強い意志 A(4) 『小さな努力の積み重ね—二宮金次郎—』(出典「私たちの道徳」小学1・2年 文部科学省)

学年	中心発問
1学年	「努力が繋がっていく『大きなこと』とは何か。」
2学年	「報われないかもしれないのに、人が努力を続けるのはなぜか。」
3学年	「報われなくても努力を続けなくてはいけないのはなぜか。」

また、ローテーションを展開する途中に授業反省を繰り返し、中心発問の修正や補助発問の工夫を行った。以下にその一例を示す。

(ウ) 中心発問を修正した例

内容項目 自然愛護 D(20) 『海ガメの涙』(出典「心つないで」2年 教育出版)

学年	中心発問
2学年	「明は心の中でどんなことを思ったのか。」
	↓ 主題について、より具体性をもった価値理解をする為に自分の生活経験と重ね合わせる発問に修正。
1学年	「人間にとって自然はどんな存在なのか。」
	↓ 班での話し合いでは、まだ具体性に欠ける抽象的な表現にとどまった為、KJ法を取り入れた。
3学年	「人間にとって自然とはどんな存在なのか、つながりを黒板にウェビングマップにして考えてみよう。」

(イ) 補助発問を付け加えた例

内容項目 きまりの遵守 C(10) 『ワールドカップ』(出典「心の元気Ⅱ」広島県教育委員会)

学年	中心発問
1学年	「父が、健児に言いたかったことは何か。」
	↓ セリフ形式で考え役割演技をすると、主題以外の価値(思いやりや礼儀)も出されてきた。そこで主題に焦点化させる補助発問を加えた。
3学年	価値を焦点化する補助発問 「結果的にさえない思いをした人とその理由は何か。」

(オ) 補助発問を修正した例

内容項目 勤労 C(13) 『真の味ひとつ』(出典「明日を生きる」東京書籍)

学年	価値を焦点化させる補助発問
1学年	「一味真とはどんな意味だろうか。」
	↓ 夫の書いた書よりも、おばちゃんの行為とその思いからの方が、より価値に迫ることができると考え修正。
3学年	「おばちゃんは仕事のやりがいをどのように考えているだろうか。□□の上には利益がある、の□□に入る言葉とは。」

また、理科教員が自然愛護、海外赴任を経験した教員が国際理解の内容項目を担当する等、担当教科の特性や教員の得意分野を活かした指導も可能となった。ICTを活用した資料提示や、手描きイラストの作成、導入で使う音源の録音等、教職員が協力しながら授業準備をすることで、様々な工夫を試みる事が容易になった。

さらに授業を常に公開することで、授業を通じた互いの研修の場とすることができた。毎週異なる授業者が入るため、多面的な生徒理解も可能となった。

イ 9月以降の実践

9月からは、より学級実態に即した深い学びとなる授業づくりをめざして、T1の教員は、週に一学級の授業を担当して、6週かけて全学級で実施している。

表2 9月以降の授業担当表(一部抜粋)

	1-1	1-2	2-1	2-2	3-1	3-2
15週目 教員 項目	佐藤・ 池田 A(4)	時永・ 池田 C(12)	湯尻・ 池田 C(13)	湯場・ 池田 D(19)	塚崎・ 池田 A(5)	藤原・ 池田 B(6)
16週目 教員 項目	時永 池田 C(12)	佐藤・ 池田 A(2)	湯場・ 池田 D(19)	湯尻・ 池田 C(13)	藤原・ 池田 B(6)	塚崎・ 池田 A(5)
17週目 教員 項目	塚崎・ 池田 A(5)	藤原・ 池田 C(6)	佐藤・ 池田 A(2)	時永・ 池田 C(12)	湯尻・ 池田 C(13)	湯場・ 池田 D(19)

これにより、学年ごとの別葉を参考に他の教科や教育活動との関連も確認することで、発達段階に応じた内容項目のねらいを吟味できるようになった。また、生徒のワークシートの記述内容を振り返りながら授業改善を行う時間が保障できた。

5 成果と課題

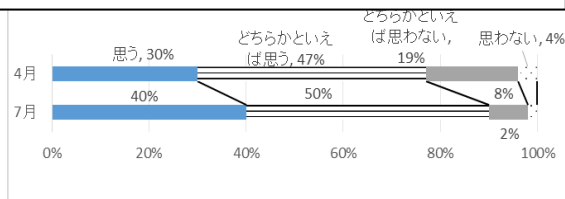
(1) 成果

ア 生徒の意識の変容

(ア) 「道徳の時間」に関して

生徒に道徳の時間に関する意識調査を4月と7月に実施した結果を一部抜粋する。

「道徳の時間」では友達と話し合うなどして自分の考えを深めたり広げたりしている。



肯定的評価が73%から90%に増加した。「道徳の時間」を通じた自己の成長についての自由記述では、次のような記述がみられた。

- ・自分の意見が人に伝えられるようになった。
- ・考えの理由が言えるようになった。
- ・一つのことを深く考えるようになった。
- ・人と思いを共有できるようになった。
- ・人の意見を踏まえて自分の意見を言えるようになった。
- ・色々な立場で物事を考えるようになった。

小グループ活動で、自信をもって自分の思いや意見を伝えたり、他の人の意見を聞くことにより、学級全体での発言も活発化してきた。さらに、終末で自分と向き合い文章を書く時間を確保する等、深まりのある道徳授業が成立しつつある。

(イ) ローテーション授業に関して

ローテーション道徳授業に関する意識調査を7月に実施した結果を一部抜粋する。

「道徳の時間」に色々な先生と授業をするのは楽しい。



肯定的評価は91%であり、自由記述では次のような記述がみられた。

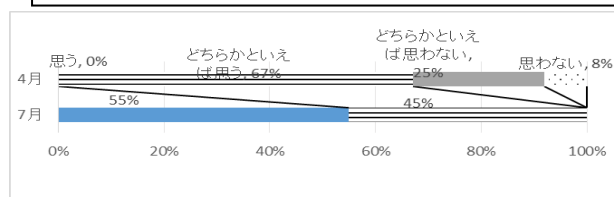
- ・普段授業のない先生と関わるのが楽しい。
- ・毎回新鮮な気持ちで授業を待つようになった。
- ・幅広い考え方に触れることができて為になる。

「道徳の時間」に対して期待をもって取り組み、様々な考え方に触れることのできる時間として捉えている生徒が多いと言える。

イ 教師の道徳に関する意識の変容

教職員に道徳に関する意識調査を4月と7月に実施した結果の一部抜粋は次の通りである。

「道徳の時間」では、生徒が自分の考えを深めたり、広げたりするような指導の工夫をしている。



道徳授業に対して、ねらいに即した指導の工夫を意識するようになっており、自由記述としては次のようなものがあった。

- ・生徒の色々な面を見ることができ、多面的な評価ができる。
- ・教科の枠を越えて当たり前前に授業公開ができる。授業力が向上する。
- ・教職員同士での道徳の話題が増えた。

(2) 課題と今後に向けて

取組をする中ででてきた課題には、次のものが挙げられる。

- ・担任との連携、配慮を要する生徒についての共通理解
- ・実施時期や回数、実施する項目

現在、担任との連携では、事前に配慮事項を確認する他、事後には帰りの会や学級通信等で生徒の文章を意図的に紹介することで、生徒の自己有用感を高める場となる工夫をしている。今後、教科化に伴う生徒への評価に関わって、学級担任による生徒の道徳性に係る成長の把握が更に重要になってくる。ローテーション授業を行う際には、担任が、より客観的に自分のクラスの生徒の様子を観察できるというメリットを評価に生かす工夫が必要である。

更に、教科化では教科書を使用する為、全学年共通の教材は使えないことから、ローテーションでの実施項目や回数について、精選した計画を作る必要がある。実施時期については、他の教育活動との関連を図る場合等、タイムリーな設定となるような調整が必要である。

生徒の心に響く道徳授業の創造にむけて、今後も全教職員で取り組んでいきたい。